

わが亡き妹：文苑

著者	ろーぜー
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 4
ページ	9 0 - 9 5
発行年	1901-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2298/5102

文苑

わが亡き妹

ろーせー

去年暑中休日に歸省せし折、わが愛らしき妹はこよなく愉快げなる笑顔もて迎へぬ。

今年寒びけに歸れば、妹はすでに此世の人にあらずき。

彼の黒きまなざし、彼の麗はしき額、彼の柔和なる眉、彼の紅る色の唇、愛の泉の溢れたる醫人の心を恍惚たらまむる、二筋三筋のれくれ毛、總て此等は、今冷やかなる一片の墓石と變じぬ。

彼女の年々に美はしく、惻巧らしく、成長まゆく姿を見るは、げに常にわが歸省の一の目的にして、また一の喜びとするところなりき。さるを、あゝ今此目的と此喜びとは、共に夢の如く消え了んぬ。

彼女の悲しき報知に接せしは、我がなほ學校に勉強し居たる時なりき。當時われは、つらき試験といふものゝ爲に遂に歸國する能はざりしが、此痛まき思ひは、日夜わが狭き胸中を苦むるものなりき。

寄宿舍の冷やかなる臥床の裡にて、われは幾度か彼の愛らしき妹を夢みけむ。實に歸省の途上、夜行列車のかたきベンチの上にて、逆旅の淋しき客室のなかにも、われは常に、此不運なる愛妹を夢むことを禁じ得ざりき。

しかも例の廣き長き町を通りぬけて、杉垣の間を左に進むこと一町餘棚の一幹し、よんばりと立てるわが舊知の門に達したる時、何故に我が愛妹の笑顔は、今日に限りにて、玄關口に見えざるかを、怪しみ、且ついふからざるを得ざりしなり。われは實にかくまで老耄えたるよ、わが神經はかくまでに錯乱したるよ。わが妹の夭折は今の今まで、わが胸奥の記憶を離れざりつらむを。

玄關にて絶えて久しき母上の御顔を拜したてまつりたる時、われらは共に無言なりき。母上は顔を覆ひて泣き給ひぬ。『静は静は』と、あゝ是れ彼女に對するわが慈愛深き母上の千萬無量の物語なりき。わが涙隕ちざらむとするも得ず。

書齋にて父上に面會したるに、例の快活なる御氣象に似もやらず、いと嚴かなる面上に、愁ひの雲少からず立迷へるを見たてまつりぬ。常ならば先づ學校のことをこそ問はせらるべきを、『静も、どう、善くなかつたよ』とたい一言、われはこの一言に總身のすたゝに刻まれゆくらむ心地しぬ。

此日の晚餐はいと静けきいと濕りつ、ばきものなりき。父上も黙し給へり。母上も黙し給へり。われもまた黙せり。唯だ傍らに例の『三毛』の罪もなく、こゝろとまる

まり居て、鼻息をかしく靜ならせるを見るのみ。やをら首をもたげ見れば、例の小さき『蠅、入、ら、ず』の上に、妹の美はしき膳具は、昔ながらに残れりけるよ。

わが歸省ときゝて、親まゝも音信れ來りし舊友を送りて、九時といふに早く寢所に入りたれど、今宵は眠さえて眠られず。幾度となく寢返へりするほどに、ふとわが視線に留まりたるものは、哀れ亡き人のうづし、繪なりき机邊の行燈影うすきに、朦朧とえて鴨居の上に照らし出されたるその人の面影は、さながら生けるまゝなりけり。その濃き眉、直ぐよかなる鼻、愛らしきまなこ、引締たりる口元、わが口よりいふはいと異なるやうに聞ゆれど、げにわが妹は美人なりき、數多き美人のうちの一人なりき。

わが恍惚として、其顔ば、せを視入り居るうち、今にも其眉は動かんとぞ、其眼は輝かんとし、其口は物言ひ出でんやうなりき。

燈火は今消えんとして、一度最後の焰をあげぬ。室内は忽ち明らみわたりぬ。うづし、繪の縹渺たる神韻は、こゝにゆくりなく消え失せて、あゝわが妹は矢張死せる人なりけり。

われは戰慄して、蒲團を舞ひかぶりぬ。妄想はあらぬ方へ馳せて、胸の中はたゞ煮えかへるべう思はれぬ。

われは遂に此一夜を蒲團のなかに泣き明しつ。女々しとなさげすみ給ひぞ。われ

は彼女の兄なれば、唯一人のは、ち、からなれば。

翌日は雪の日なりき。午後に至りて天氣うらゝかに晴れわたりたれば、われは手飼の愛犬『カブ』を伴れて、夕暮み山に詣でゆきぬ。

眞光寺といふ旦那寺の山門をくぐり、庫裡に添ひて裏手にまわり、やがて水仙池のあるはとりを左へ進めば、櫓の樹三もとはどたてゐる下に、我家の塋域はあり。祖父君の御墓は右にあり、祖母君のは左にあり。其はざまに、未だ新らしき小さきおくつぎの打立てるなむ、やがてわが妹のそれなりける。

雪は櫓の梢の支へ居れば、墓上にはま、か、すがに積り居らねど、葉末の雫を、や、み、な、く、滴り落つれば、墓表の面はまたゝかに濡れたり。

雪をけて一山あさりつくしたれど、冬枯の野邊に咲きうつる花どてなく、己むなく『し、や、か、き』の枝五本六もと折り來りて、墓前にたむく。閑伽の水は、雪解けの水の溢れいでんばかりなり。

あゝ去年の九月家をいで、學校に向ひたる折、いかでわれ、此怨めしき今日あるとを想ひたらむや。町のはづれの石橋の上にて『それでは御壯健で、御勉強あそばせ』と、名残惜しげに物言ひたる其人を、いかでわれ、今日此冷やかなる一片の墓表に認めんと想ひ設けむや。斯くと知りたらば、此夏の休日にも、急ぎて歸省したるべきを、緑髪紅顔とてしなへに逝きて、今よりは唯だ歸省の度々、この青白きむと、たらしき。

一片礪をわが愛らしき戀しき懷つかしき妹とし會はざる可らざるか。天地に一人の妹は、今天の寵兒となりて、遠き高き樂園の花の木陰に舞踏まつゝあり。天の寵兒となるはよし。樂園に舞踏するまた惡しからねど、たゞ此せちがらき浮世に、愛の光を失ひて、常闇の砂漠をさまよひつゝある、不運の一家族を残せるをいかん。墓前に蹲まりて、つくぐとありし日、越方のごとも案じ居れば、涙しきりには、ふり落ちて、やまず傍らには忠僕のカブ、四足そろへて穩まやかに、まきりにわが顔をうち守れり。

米の詩狂ボー曰く、『詩の問題中最も悲愴なるものは『死』なり。而して死の最も悲愴なるものは、美人の死に如くはなま』と、われ敢てわが妹を以て、かゝる美人の一人と僭稱するものにあらぬものからなほわが愛妹の死は、わが爲には、慥かに最も悲愴なるものなりき。

今日は遂に油布が嶺に落ちなんとす。赤褐色なせる雲の間より、八方に射出したる最後の光線は、畏ろしきまで滿野の白雪に照り輝きて、こゝにさながら天上の大觀は現れいでぬ。實に大なる牡嚴のうちに、大なる悲愴の色を溢らしたるなほ、雪の夕の景色なりかしと、われは暫しうつとりとして佇み居ぬ。

忽ち風いでぬ。眼前の大觀は、次第々々に幻像の如く吹きちらされて、野は今淡はく暮れゆかんとす。されどわれなほ、凍りたる小さきおくつぎを抱きて去らず。あは

れ望むらくは、今夕『夕暮の鐘』の鳴らであれかし夜ふくる迄此所にありてカブと
共に、わが愛らしき妹の伴侶となりやらむものを。

(完)

怪しき鴉

“Respite-respite and nepenthe, from
the memorie of Lenore,

Quoth, O, quoth kind nepenthe, and
forget this lost Lenore,”……Poe

かげぼうし

搔き曇りたる冬の夜半、獨り古き書ども繕きて娛み居たりしが、われにもあらず眠
氣さして、兎角うつむき勝ちとなり、時、窓の戸叩く音、ほどほど聞えけり。

吉丁子結びたる灯は、大方消えかゝりて、怪しき影を、うすぐらき床の上にうつせり。
われは、只、明け行く空のみ待たれつゝ亡きレ、ハ、ハ、アの事堪へがたく慕しければ、兎
角きて切なき心まぎらさんとせしが、美しかりし昔しの姿ありくと胸中に描き
出され苦しき胸は、さながら搔き亂さるゝやうに覺えぬ。

掛け亘せる紫の幃、かさゝと風なきに鳴りいづれば、ぞとずる計り悽みを感じ、
わが胸はいつしか、恐怖の念に満されぬ『人の來りまにや』と呟きながら、開きし窓よ